

鬱陵島調査概況

第一位置及地勢

鬱陵島ハ雀山ヲ距ル百ハ拾哩元山ヲ距ル百ハ拾哩日本ノ隠岐ニ距ル一―百四拾哩海洋ニ孤立セル一島嶼ニレテ周圍凡ソ拾里全場皆巖石ヲ以テ致テ大ニ高低ノ山ヲ築キ無數ノ深窟其間ニ縦横ニ山巔ヲ結間ニ至ル迄鬱陵島ノ樹木ヲ以テ蔽ハレ極ナリ壯觀ナリ沿岸一帯皆殆ント懸崖絶壁ニレテ港灣殆ント無ク風浪ノ隆ハ船舶ノ難リ難ルニ由テ僅カニ直洞ト稱スル所ニ於テ絶壁ノ間ニ極ナリ狭キ一小港アリ日本ノ風帆船亦百石積以下ノ者ハ此處ニ来テ碇ヲ下ニスト重ク風浪ヲ防グニ足ラザリ以テ皆之ヲ陸ニ引揚ケ居レリ故ニ濠洲ノ如キハ穩波ニ集ムルニ非サレト誤島ニ至

ル事ハ甚ク危險ナリ此ノ如キヲ以テ元山在る若シク日本ノ  
境若クハ馬関等島ニ該島ニ接近セル場所トモ舟  
楫ノ往來至テヤサテ所謂絶海ノ孤島ナリ陸上ノ交  
通ニ亦多クノ山石ノ上下セザルヘカニナルヲ以テ殆ト通  
路ト稱スヘキ者ナリ一ノ村ヨリ他ノ村ニ至ルニハ極メテ困  
難ナリ

第二産物

海産物トシテハ若布、天草、鮑魚ノ類ニシテ其産額ハ  
多クテ海産物ノ海衣概シテ深ク且巖石多クキリ以テ  
全ク見込ナシ

農産物トシテハ大豆、麦、及馬鈴薯ノ類ナリ然レモ全島  
小ノ島在ニシテ在テ平地ナキヲ以テ島民ハ小ノ平腹ニ島  
ヲ開キテ一時種セザル可カラズ島地ノ面積ハ餘リ廣クニ

人而モ既ニ開墾シ尽シテ寸尺ノ余地ナキカ如シ大豆ノ  
総産額ハ年平均凡ソ五千石ニシテ内年平均三千石ハ重モ  
之ヲ日本ニ輸出ス其代價日本相場平均ニ万圓位ナリ麦ノ  
産額ハ其重量ニ詳クニ見ルハ島民ニ千五百  
石ノ常用ニ供給シテ殆ト餘剩ナリ僅ク五百石乃  
至五百石以上輸出ナリ

馬鈴薯ハ島民ノ副食物トシテ用ユルモノニシテ産額  
多クラス

林産物ハ冥ニ檜、陸島ノ價リ高クモノニシテ樹木ノ重ムル  
者、槻木、白檀、柘、ブナ、タテ、楠、桑等ナリ

槻木ハ其質頗ル佳良ニシテ日本ニ多ク其比リ見スト云フ  
然レモ其大ニシテ價アルモノハ既ニ今日迄ニ殆ト伐採  
シ尽シテ六尺以上、重ク五百石以下ノ者ニシテ現存スルモノ

僅カ二百五拾株に過ぎず其内九尺内外ノ者甚モ多シ  
而シテ其製材ニ適スルハ又三分ノ一弱ナラシニ尺以上六  
尺以下ノ者ハ其數少クテラサレモ小ナルヲ以テ價廉ナリ  
要スルニ觀木ハ今迄未ダ見ズ

白檀ト稱スルモ 印度地方ニ生長スルモノト其質ヨリ異  
シ香氣少クテ臭ノ白檀ト稱スルヲ得サル由ニテ其價  
廉ニシテ又絶壁ノ上ニ在ルヲ以テ伐採困難ナリ株數ハ  
少カラサル見ズ

柘ノ其數甚ク多ク且大ナリ然レド樹質良好ナラズ  
木材トシテモ價値少シ

稱ハ以前ハ多クシモ今日ハ切リ尽シテ少ナシ竹葉ハ上  
等ナリ

其他ハ甚ク又

第三 輸出入

輸出品ノ重ナルモノハ觀木材ハ別トシテ大豆、麦、胡大、鮑、  
天草、雜、等ナリ

三十年、三十一年、三十三年ノ三年間ノ平均輸出高ヲ日本  
相場ヨリ以テ示セム一年平均

大豆	産出 萬圓	
胡大	産七百七十圓	韓人ノ産出スルモノ
麦	産九百六十圓	
鮑	産九百六十圓	
天草	産千四百圓	日本人自ラ取リテ持テ歸ルモノ
雜	産千四百圓	
合計	産三千九百九十圓	

輸入品ハ綾、木綿、屋巾、綿、其他、飲食、農用品、コレナリ

三十年及三十二年ノ平均輸下高 七千円内外あり  
輸下品ハ在島日本人カ自用ニ保エル外韓人ノ大豆、胡太  
麦等ト交換スルナリ  
仕出地及仕向地ハ島ハ通洞日本ハ境、馬関、鶴賀、源田  
等ニシテ境ハ其セカクハム

第四島治

島民戸数五百二十人ハ二千五百有存 島監ナルモノアリテ  
島治ヲ司ル島監也下ニ各村ニ村長ナルモノアリ 村ノ世話  
役ナリ 島監役場ハ今通洞ト稱スル處ニアリ 現  
島監リ喪季周ト稱ス韓進ヲ一々ノ俸給ヲ受ケス  
又島民其他ヨリ取入セナキヲ以テ貧窮ニシテ無執力  
カナリ カフニ權カナキヲ以テ島民ノハカハ尊厳シテ  
其命ニ服セト故ニ治績等ラヌ 島民相互ノ間隣保

相親ニ能ク共同生存ノ秩序ヲ保テリ 喪島監ハ日本ニ  
三度到リタルコトアリ 稱ル日本語ヲ解シ日本人ノ考  
ナリ 類ナル便利ナリト在島彼レ日本ニ到リ 榎木材ノ日  
本ニ於テ價值ヲ知ル故ニ常ニ自ラ伐採シテ日本人ノ  
一人ニ結核シ利益ヲ專シセトノ考アリ 昨年以來彼カ韓  
国内部ニ向テ日本人榎木並伐云々ヲ報告シ又ハ島民  
榎木ヲ視ルニ生命ノ如シ林云ヘルハ在島其ノ魂膽ニ出ル  
モノニシテ島民ハ 榎木ノ價ヲ解セス山ニ入りテ見ルニ  
皆之ヲ薪炭用トシテ伐採シ居ル 此ノ如キヲ以テ島  
監ト日本人間ハ感情面白カラシ

第五在島日本人

在島日本人ハ其モニ島根見人ナリ 其数ハ年ト時ニ依テ  
増減アリ 一定セス 現在ノ数ハ百人内外ナリ 在島日本人

ノ話ヲ聞クニ日本人ノ該島ニ初テ来リタルハ此年廿四年  
結實造ノ為ナシ人渡航シ来リタルハ始ナトシ其後續ク  
アリタルニ廿五年より廿八年迄ハ明カナラズニ廿九年以後  
數百人内外在島セリ産モニ榎木伐採者並ニ其所属  
員ナリ目下在島ノ百人ハ日本より元山若シハ産山ノ内々  
渡航ノ途中天氣ノ都合ニ依リ寄港シタル者及熊丸  
来島シタル者カ船舶ノ出港免状及旅券ハヨク  
元山若シタル産山家テナリ彼等ハ通關ト稱スル村ヲ中  
心トシテ集メテ其他各所ニ散在ス彼レハ一ツノ組合ヲ  
作り幹事ヲ置キ以テ相互ノ秩序ヲ維持ス  
島監兼テ周ニハ餘リ教服セザル風ナリ別ニ乱暴等  
ヲ慮レタルコトナシ殊ニ前幹事片岡吉次衛士ルニ及  
現幹事松本繁榮ハ能ク衆島監ト折台ヘ居シ

島民トハ至テ感情巨款島民ハ日本人ニ依リテ多クノ便  
利ヲ享ヘラレ居ルニテ其ニ居ル島民ノ衣服地タル綾木  
綿産甲斐ノ皆日本人ノ輸入ニ係ルカ國トノ往來ハ皆  
日本形風帆船ニ依リ現ニ寄港中ノ者拾壹艘ヲ見  
タリ平均百石積内外ナリ港ナク風浪高キヲ以テ往  
來至テ少シ

第六 檳榔嶼島ニ對シテ將來ノ見込

前未述ヘタル所ニ依ルニ海産物ハ見込甚ク少ク加フルニ  
近頃鮑天草大ニ其數量ヲ減シタル模樣ニテ在島日  
本人話ヲ聞クニ若木船一艘以上見込ナシトコト農  
産物ハ大豆ヲ除キテ他ニ見込ナシ之トモ僅クニ年  
輸出額三千石ニ過キテ尙將來其產額ヲ増加スル見  
込ナシ且ニ有望ナリト稱スル山林中畝ニ價値アリト觀

